

## 果樹を加害するカメムシ類の生態に関する研究

(第3報) チャバネアオカメムシとツヤアオカメムシの寄生植物について

山田健一・宮原 実・行徳直己

(福岡県立園芸試験場)

果樹を加害するカメムシ類(チャバネアオカメムシ、ツヤアオカメムシ)の発生状況を把握する方法に、第1報で述べた予察灯による誘殺法と各種植物上における寄生調査などがあり、特に後者は発生分布や密度、発育状況を直接に知りうることから重要である。しかし、その寄生植物については現在のところ十分に調査されたものがなく、自然下での発生密度調査は全く手さぐりの状態にある。そこで野外での発生量を把握し、的確に発生を予測するためには寄生繁殖植物を明らかにする必要性を考え、過去数年にわたり調査をおこなった。今までに知りえた多くの寄生植物と繁殖可能な植物などをここにまとめて報告する。なお、本調査に多大の協力をえた甘木病害虫防除所に深謝の意を表する。

## 1. 調査方法

1973年から毎年主として5月～10月頃に県内各地を巡回して、見取り法および叩き落し法によってカメムシの成虫、幼虫が寄生する植物について調査した。なお、偶然に寄生していたと思われるものは除外し、明らかに吸汁加害された植物のみについて記録した。

## 2. 調査結果と考察

チャバネアオカメムシ成虫の寄生を認めた植物は42科88種の多岐にわたり、極めて雑食性であった。この中で特に寄生の多かった植物は各種の果樹のほか、スギ、ヒノキ、ヤマモモ、サクラ類、モリシマアカシア、ハゼノキ、ウメモドキ、ネズミモチ、キリ、サンゴジュ、グレイソルガムであった。次に幼虫の寄生を認めたのは19科23種の植物であったが、このうち老令幼虫以上に発育を認めたのは16科20種であった。この中で特に幼虫の寄生繁殖が多かったのはスギ、ヒノキ、ウメモドキ、サン

ゴジュであった。

ツヤアオカメムシ成虫の寄生を認めた植物は前種よりも少なく、16科22種であった。この中で特に寄生が多かった植物はスギ、ヒノキ、カンキツ、カキであった。幼虫の寄生を認めた植物は極めて少なく、現在のところスギとヒノキの2科2種のみである。

以上のようにチャバネアオカメムシとツヤアオカメムシの寄生繁殖する植物のうち、普遍的に寄生が多く、しかも全国的に栽植が圧倒的に多いのはスギとヒノキである。そのためこれらの植物がカメムシの主たる発生源となり、この結実量の多少が発生量に大いに影響しているものと推定される。

次に、2種カメムシの時期別に主な寄生植物について整理してみた。それによるとチャバネアオカメムシは越冬後には開花結実中のサクラ、クワ、ヤマモモなどで寄生を多く認めた。このうちクワでは5月下旬以降7月上旬まで多くの産卵を認めたが、老令幼虫までの発育は殆んどなかった。スギ、ヒノキ、キリでは越冬後から長期間にわたって多くの成虫寄生を認め、特にスギとヒノキでは7月以降に幼虫の寄生が多くみられる。ツヤアオカメムシでは全般に発生量が少ないため観察例は余りないが、5月～6月はサクラとキリで、7月後半以降はスギ、ヒノキで寄生を認めている。

以上のように、2種カメムシはいずれも年間を通じて同一植物に定着することはなく、次々と好適な餌を求めて各種の植物を転換する。そのため時期により、多く寄生する植物の種類が移り変わるため、野外での発生密度を把握するには、時期別に調査の対象とする植物を変えながら追跡調査する必要がある。